

②「与え/与えられる関係」から「共に生きる関係」へ

村田和夫

一 新しいボランティア活動への模索

横浜ボランティア協会は、青少年を健全に育成するため、地域におけるボランティア活動の推進を図ることを目的に、一九七四年十月に設立され、翌年三月に社団法人として認可された民間団体で、通称「ボラ協」と呼ばれています。ボランティアという言葉が、今日でこそ市民権を得、障害者や老人、家庭的に恵まれない子どもを対象とする活動だけでなく、あらゆる分野で使われたのは、一九七〇年代にはいつてからです。「ボラ協」が、青少年健全育成を目的とする、全国でもユニークなボランティア団体として設立されたのも、こうした傾向と一致しています。

それは、一九六〇年代の高度経済成長が、人々に生活の便利さや物質的豊かさをもたらした半面、急激な都市化の中で自然を破壊し、地域連帯の欠如などの精

神的貧困をもたらした結果、一九七〇年代の石油危機を契機に、人々の間で「豊かさ」とは何かの見直しが始まったからに他なりません。青少年の生活を例にとると、自然の遊び場が工場や宅地に変えられ、放課後や休日は、学校教育の延長または補完としての塾に通い、その気ばらしとしてテレビやゲームに興じる。それに核家族化の傾向が拍車をかけ、一人でしか遊べない状況を作り出しています。そうした孤独な状況に反発あるいは逃避する青少年は、仲間を求めて人生をさまようという、きわめて不安定な状況に置かれています。高校進学率が一〇〇%近く、大学進学率約三七%という数字

の裏に、実は青少年時代を犠牲にしている姿が浮かび上がってきます。教育制度や施設が充実し、物や金が豊富になることは、人間の心も豊かになるはずでありました。ところがそれだけでは十分ではないだけでなく、かえって悪い結果をもたらしました。青少年の非行や犯罪は、

もはや経済的貧困が主な原因ではなくなっているのです。むしろ、大人の誤った「善意」によって多くのものが与えられ過保護にされた青少年は、社会の急激な変化、困難に対して、自らの力で克服して生きていこうとする意欲を失っているのが現状です。

このように、青少年問題一つとっても、経済的豊かさが人間的豊かさ(文化)を保証するための必要な条件ではあっても、決して十分な条件ではないことに気づきます。このことは、社会のあらゆる分野でも見直されてきたのです。ですから、ボランティア活動に対する考え方も、単に恵まれた者が恵まれない者に奉仕するという「与え/与えられる関係」として理解されてきた時代から、共に生きる者として、互いに自立し、連帯していく関係を創り出す活動へと変化している時代になったのです。ですから、「特別な人が特別な人を対象に特別なことをする活動」ではなく、あらゆる分野で新

- 一 新しいボランティア活動への模索
- 二 青少年育成のための市民運動のセンター
- 三 保護や援助でなく、自立し、社会参加できる条件づくりを

二 青少年育成のための市民運動のセンター

「ボラ協」は、青少年が集団活動の具体的体験を通して、「参加と自治」「自立と連帯」のあり方を学び、ボランティア精神をもった人間に成長することを願っています。そのためには、青少年が集団をつくり、自主的な運営と活動ができるよう、側面から援助する指導者が必要なのです。しかも、こうした青少年活動が活発に行われるためには、市民の間での理解がなければなりません。特に、学校教育に偏重している教育のあり方を改め、市民ぐるみで青少年を育成していくとする運動として浸透する必要があります。すなわち、青少年育成は、市民運動の

一環として自主的に進められるものであり、そのための推進機関（ボランティア・センター）として機能するように求められているのが、「ボラ協」の使命だといえます。

その機能とは、第一には、青少年のためのボランティア活動を求めているニーズの調査・開拓・相談です。第二には、それらを支える人材の確保、活用です。第三には、ボランティア活動の拡大、普及のための広報啓発です。そして第四にこれら三つの機能を有機的に結びつけ、具体的に活動できるよう、実践の場の提供、ボランティアの研修、交流、連絡調整です。

「ボラ協」は、これら四つの機能を促進するため、

- (1) ボランティアの発見及び登録
 - (2) ボランティアの研修
 - (3) ボランティアの紹介及び派遣
 - (4) ボランティアの受け入れ側の啓発
 - (5) ボランティアについての広報活動
 - (6) ボランティア推進機関との連絡調整
 - (7) ボランティアに関する調査及び研究
 - (8) 機関紙の発行及び図書刊行
- 等の事業を行っています。

では具体的などのような活動が展開されているかを、昨年度（一九八〇年四月～一九八一年三月）の例で紹介いたします。

① ボランティアの輪を広げる

「ボラ協」の活動に参加するには、協会運営や財政面でボランティア活動を支える「会員」と、特技や労力で実際に青少年を指導する「活動ボランティア」の二つの加入、登録方法があります。一九八一年三月現在、会員数一、四六三人（表一、図一）、活動ボランティア登録数七九四人（図二）です。

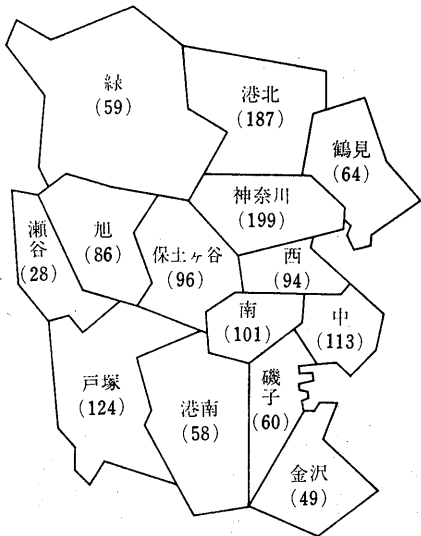
活動ボランティアの内訳は、活動の性格上一〇代～二〇代の若い人々で約半数を占めています（図三）。

そして、活動に参加する動機は、「何か役に立つことをやりたいが、何をしようかわからない」、または「求められれば、何でもやってみよう」とに要約される

表一 活動ボランティア・講師・会員登録状況

区分	1979年度	1980年度	増減	
活動ボランティア	662	794	+132	
ボランティア講師	55	59	+ 4	
正会員	個人	989	1,108	+119
	団体	98	104	+ 6
特会	個人	115	141	+ 26
	団体	98	110	+ 12
計	1,300	1,463	+163	

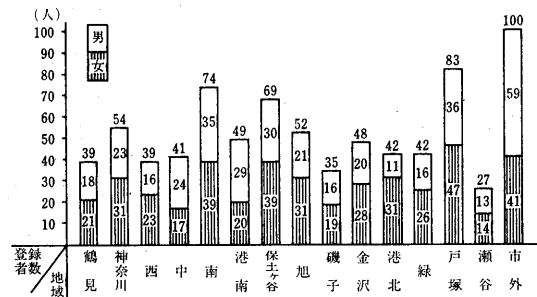
図一 地域別会員数



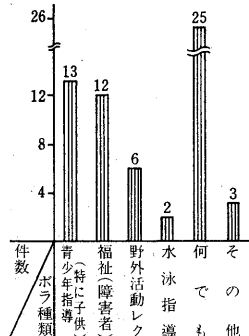
図三 年代別登録者数



図二 地域別登録者数



図四 説明会参加者活動希望内容



ように、具体的な問題意識や希望は明確ではありません。ちなみに、「ボランティア説明会」に参加したボランティア希望者六一人の活動希望は、①何でも②青少年活動 ③福祉活動（主に障害者相手）の順になっています（図四）。

表一 2 ボランティア講演会

期日	会場	内容	講師
5月31日	横浜市 教育文化 センター	「家をひらく」 ～身近なボランティア 活動を求めて～	木原孝久 (福祉教育 研究会主宰)
7月26日	戸塚地区 センター	「家をひらく」 ～身近なボランティア 活動を求めて～	木原孝久 (福祉教育 研究会主宰)
10月11日	菊名地区 センター	「大人は子供に何が できるか」 ～子供達は、今何を 考え、何を訴えよう とするのか～	箕原実 (神奈川県 中央児童相談 所長)
3月23日	横浜市 教育文化 センター	「最近の国際環境と 日本の情勢」 ～青少年に何を伝え、 何を残していくか～	関寛治 (東大教授)

表一 3 地域別研修グループ

研修グループ名	区	人数	内容
1 エンゼル会	鶴見	32	幼児の保育
2 まど	〃	18	子供の文化学習
3 白百合	神奈川	16	子供の集団指導
4 亀ノ子会	〃	16	日本史学習
5 西寺尾	〃	10	子供の教育
6 日誠会	〃	15	集団指導のあり方
7 大岡育成会	南	15	子供会育成
8 五一会	〃	11	地域理解
9 てのひら	〃	13	乳幼児教育
10 文庫の会	港南	14	子供の読書環境
11 なずな	〃	15	障害児教育
12 史の会	〃	110	歴史学習の世話
13 芦ヶ谷ボランティア	〃	25	地域福祉と実践
14 山吹の会	〃	100	古典文学学習の世話
15 ひなげし会	〃	15	子どもの育成
16 いつみ会	港南	22	古典・近代文学の学習
17 寺子屋	中	6	識字学習
18 白百合	〃	6	俳句づくり
19 よこはま童話会	保土ヶ谷	13	童話作成
20 保中グループ	〃	8	万葉集の学習
21 仏向団地グループ	〃	19	万葉集の学習
22 権太坂境木自治会	〃	20	子ども会育成
23 せせらぎ	〃	10	俳句学習
24 井口教室	旭	14	地域見学
25 親子体操研究所	〃	12	親子体操プログラム
26 大綱中同窓会	港北	10	同窓会と地域
27 白バラ会	〃	15	地域活動
28 湘南六浦文庫	金沢	12	文庫活動
29 らんじえ	〃	7	人形劇づくり・実践
30 桜美会	戸塚	12	俳句・短歌学習

初めてボランティア活動に参加する人々は、「困っている人を助けてあげたい」というきわめて善意のある人々です。そして、こうした意欲のある人々が増えてきたことは喜ばしいことです。しかし、中には、「やってあげる」という善意の押し売りや、恵まれない人々に上から下へ与えてあげるという意識の人もいます。相手の立場や周りの状況を考えられない単なる善意だけでは、かえって迷惑

になることがあります。ですからボランティア自身が学ぶ姿勢をもって、自分の生き方をみつめ直すという、問題の共有者として活動に参加することが大切なのです。そこで、ボランティア活動に対する正しい理解を求めて、地域や学校、職場、家庭という身近な生活の場で、問題を発見し、共に考え、共に行動するボランティアになるよう、講演会や啓発活動を行っています。昨年度は四カ所でボランティア講演会を実施しました(表一2)。

実施しました(表一2)。

また、青少年育成キャンペーンや会員募集事業、ボランティア名簿の作成など、ボランティアの輪を広げる活動を展開しました。

② ボランティアの学習を援助する
青少年を指導するボランティア活動では、ボランティア自身の人格や能力が特に問われます。そこで、まずボランティア自身が自主的に学習するグループづくりを援助するため、講師・相談員の派遣を行ってきました。この学習グループは、「地域別研修グループ」と呼ばれ、

現在、市内三〇カ所で活動しています(表一3)。

また、各種研修会を実施し、ボランティア精神の理解や技術の習得を図ってきました(表一4、表一5)。

ボランティア研修会では、特に若い時代からボランティアへの理解を図るため、①高校生ボランティア研修会、②青年ボランティア研修会を合宿で行っていました。

特技指導者研修会では、地域からの要望の高い、①キャンプ指導者 ②軽スポーツ指導者 ③児童文化指導者 ④レク

表-4 ボランティア合宿研修会

事業名	期日・会場	内容・テーマ
第5回高校生 ボランティア合宿研修会	12月25日～27日 県立津久井青年の家 1月11日 横浜市婦人会館	ボランティアとは何か、を主題 にして、参加者の生き方、考え 方を問い返す。
第3回青年 ボランティア合宿研修会	3月20日～22日 県立湘南青少年の家	いかに生きるか

表-5 特技指導者養成研修会

事業名	会場	期間
青少年指導者のた めのキャンプ教室	野島公園野営場・横浜市婦人会館	7月5日～7月11日 (1泊2日を2回)
軽スポーツ指導者 養成研修会	磯子地区センター・森東学校	9月19日～10月3日 (5回)
楽しい指人形劇 づくり教室	戸塚地区センター	10月1日～11月19日 (8回)
レクリエーション 指導者研修会	1期 県立紅葉ヶ丘青少年会館 横浜市平沼記念体育館 横浜市野島青少年研修センター	12月2日～12月14日 (5回)
	2期 県立紅葉ヶ丘青少年会館 横浜市野島青少年研修センター	1月6日～1月27日 (6回)

表-6 相談内容月別状況

内容	(月)	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
ボランティア相談		20	36	13	12	7	9	21	8	4	7	5	9	151
教育相談		2	1	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	7
青少年活動相談		3	4	3	0	2	1	2	0	0	1	1	1	18
学習相談		4	1	1	2	3	4	3	0	1	0	1	0	20
その他		4	6	7	6	1	4	4	3	4	3	2	2	46
月別合計(受付件数)		33	48	24	20	13	20	30	11	11	11	9	2	242

図-5 相談受付階層別内訳

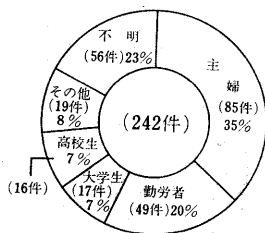
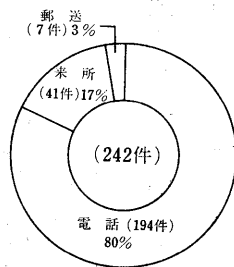


図-6 相談方法



③ ボランティア活動に関する情報を提供する

リエーション指導者 ⑤ 水泳指導者をめざす学習を行ってきました。

さらに、ボランティア活動を始める人々のための「手引書」づくりも進められています。

ボランティア活動は自主的に進めるべきではありませんが、実際に何をどのようにするのかわからないのがボランティア希望者の現状です。そこで気軽に相談できる「ボランティア相談電話」を設置し、活動の場の紹介や進め方などを助言しました(表-6、図-5、図-6)。

また、地域からの要請に応じ、活動ボ

ランティアと講師の派遣をしました(表-7、図-7、図-8)。

こうした援助活動は、地域の自立活動を促すための一助として位置づけられています。ともすれば、「ボランティアを頼めば何でもやってくれる」「すべてボランティアにおまかせ」という、依頼者側の無責任な態度もあるからです。ボランティア活動によってお互いに高まってくる側面には、求める側も求められる側も、しっかりした主体性の確立が必要なのです。

こうした派遣、紹介活動の他に、ボランティア活動に関するさまざまな情報は、毎月一回発行される機関紙「ボランティア横浜」「妹版」によって、会員、活動ボランティアのもとに届けられます。協会設立以来、一九八一年三月までに六九号(妹版は四一号)を発行しました。

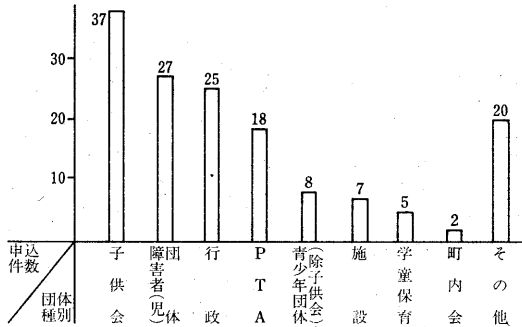
情報の提供とともに重要なのは、各種機関、団体との交流、連絡調整です。特に、これからのボランティア活動は、行政と民間、福祉と教育、健常者と障害者、青少年と老人、などと明確に分けて

表一 派遣・紹介受付月別状況

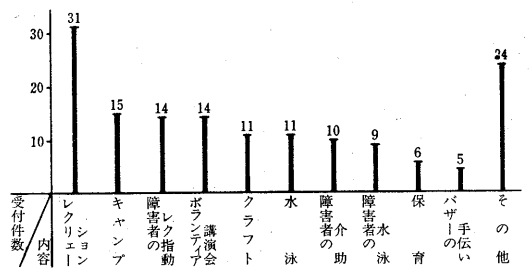
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
受付件数	6	20	23	28	11	9	15	15	2	2	11	8	150
派遣・紹介人員	9	37	80	43	14	1	25	14	0	1	13	8	259
不成立件数	1	4	3	13	0	2	1	2	1	0	0	2	29
うち主催者側の辞退	0	4	2	9	0	1	0	1	0	0	0	1	18

別々に活動するのではなく、ふれあいと協力を通して、お互いの違いを理解しながらも、共同した働きが求められています。そのために、「ボラ協」に登録している活動ボランティアの地域別交流会をはじめ、福祉ボランティアとの交流、福祉のボランティアセンターとの連絡調整、各区の行政担当者との連絡会議、学校教育との連携など、幅広くボランティア活動推進のための体制づくりを進めています。

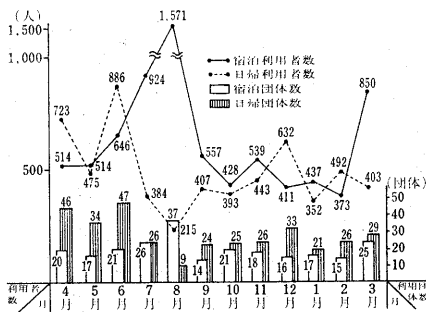
図一 派遣・紹介申込団体別状況



図二 派遣・紹介受付内容別状況



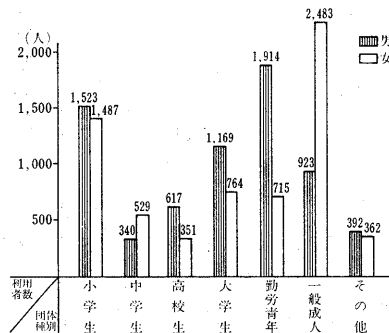
図三 月別利用状況



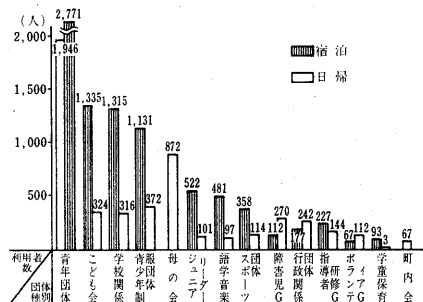
④ 青少年施設の新しい運営に取り組む
横浜市には、青少年の家、勤労青少年センター、地区センターなど、青少年が利用できる施設があります（青少年会館は二カ所ありましたが、地区センターの建設により、現在はありません）。そして、横浜で初めての宿泊研修施設が「野島青少年研修センター」として一九七八年夏にオープンしました。これまでの青少年施設の運営方法は、行政の直営方式と地元への委託方式の二種類でしたが、この施設は、公設民営の施設として、「ボラ協」が管理、運営する新しい方式で出発しました。そして、市民の青少年活動の場として親しまれ、年間利用団体五九三、利用者総数一三、五六九人という利用状況でした（図一、図二、図三、図四）。

利用者が多いことは、こうした宿泊研修施設が絶対的に少ないこと（市内で一カ所）の理由の他に、職員とボランティアが利用者と共に宿泊し、内容的な指導・助言まで、きめ細やかな応待ができた

図四 階層別・性別利用状況



図五 団体別利用状況



からに他なりません。ともすれば貸館的に管理面だけを重視する運営になったり、逆に、プログラム内容にまで介入しすぎて統制したりする傾向に陥りがちな施設運営のあり方は決して望ましいことではありません。今後の施設運営では、管理面だけでなく内容的な充実に向け、ボランティアや民間団体にまかせるという、公設民営方式が考えられなければなりません。

三 保護や援助でなく、

自立し、社会参加できる

条件づくりを

以上、主な「ボラ協」の活動を紹介しましたが、これらの事業は、企画から運

営まで、すべてボランティアと職員の間で進められています。このように、直接、地域で青少年を対象に活動することだけがボランティア活動ではなく、それを支え、推進するための条件づくりをする活動も大事なボランティア活動です。むしろ、これだけボランティアという言葉が浸透し、活動に参加する意欲のある人々が増えてきた今日、ボランティアを育成し、財政的にも支える人材や組織が求められています。これからの「ボラ協」の活動は、そこに重点がおかれています。

そして青少年が、障害を持った人々のふれあいや、それらの人々への援助活動、あるいはワークキャンプなどの勤労体験学習、街づくり活動への参加など、

ボランティア活動を通して人格形成ができるような、新しい青少年活動のあり方を開発する必要があります。福祉や保護の対象としてだけ、青少年をとらえるのではなく、社会に生きる主体としてとらえる新しい発想こそ、これからのボランティア活動の中心的課題です。このことは、障害者や老人を対象とするボランティア活動にもあてはまります。障害者や老人あるいは婦人が、社会に生きる主体として行動しようとしても、それをばむ環境と意識がまだまだ社会に存在しません。それを意識的にも、無意識的にも放置しておきながら、個人的な憐れみや同情でボランティア活動をすることは、かえって問題を隠蔽する結果になります。

問題なのは、障害があることではな

く、そのことによって差別され、特別視され、社会に参加する機会を奪われていることです。逆に言えば、それを許している人々が存在しているわけです。そのことの反省を欠いて、すなわち自分自身の問題として自覚しないボランティア活動は改めていかなければならないでしょう。

障害者や老人、青少年をボランティア活動の対象として固定するのでなく、社会を構成し、参加する主体として認め、問題の共有者として共に生きていく活動こそ、これからのボランティア活動の課題だといえます。そして、行政やボランティアセンターは、そのための条件づくりをしなければならぬと思います。
〈社団法人横浜ボランティア協会職員〉